

オタマジャクシの姿を見たその日から、オタマジャクシの成長を見るのが日課になった。まるで小学生の夏休みの成長間観察みたいだが、それを自然の状態で観察できるのは嬉しかった。最初に見てから十日もたったころオタマジャクシに足がでてきた。さらに十日後にはすっかりカエルらしい姿になってきた。そのころになると立派なカエルが姿を現すようになった。親ガエルが子どもの成長を見届けに来たのかなとも思ったが、大型と中型のカエルの二種いるのが気になった。

と、数日経つとあれだけいたオタマジャクシの姿がよくよく探さなければ見当たらなくなってしまう。急にカエルとして自立したとは思えない。あまり想像したくないが子どもは成長を見届けに来た親ガエルと思ったのは、単に腹を空かせたカエルだったのではないだろうか。ずっと成長観察を続けて来ただけになんともいえないエンディングだ。今になって振り返ると、オタマジャクシはこの小さな池でも常に過酷な生存競争に晒されていることがわかる。翌年の四月の初めに今度は立派なカエルの卵を見つけた。四月の半ばをすぎると卵の中心の黒い勾玉状のものがモゾモゾ動き始め、その数日後にはオタマジャクシとなり泳ぎ始めた。昨年のオタマジャクシより小さく別の種類のカエルなのかもしれない。今度は成長を見届けようと思ったが、それから数日したら姿が見えなくなってしまった。さらに次の年は、同じく四月の中旬に卵を見つけたが、それはオタマジャクシになったのを見ることなくいつの間にか消えてしまった。この三年間で一匹でも生き延びてカエルになり卵を産みにこの池に戻ってくるのができればと思ってしまう。

さて、話を川と池が完成した年に戻そう。夏の暑さがようやく収まって来た頃、池のまわりは草ぼうぼうの状態で何がはえているのかわからなくなっていた。そんなとき、池の水の中から細い葉をもたげているのが目に止まった。他とは違って少し肉厚の細い葉はガマのそれと思われた。もし、そうだとするとこの敷地から姿を消したのが、私が川と池を掘ったことよって蘇ったということになる。それも掘ってからわずか半年足らずのことだ。川上から種が流されて池に落ち着いたのか。それとも、じっと地下でまた環境が変わるまで身を潜めていたのか。いずれにしろその復元力には驚かされた。

そもそも川と池を掘ることを決めた大きな理由は、水辺が無くなったことによる植生の変化をもう一度再生し多様性のある場所にできないかということだった。それが自分たちの手でスイレンを植えたりなんだりしている間に、水で暮らす昆虫が集まって来て、水辺を産卵場所にするトンボやカエルも目ざとくやってきて、ついには姿の消えたガマがもどってきたのだ。それも半年という短い時間で。

粘土質の水はけの悪い土地だったこともあり、いわゆるガーデニングを自らやることには関心が無かったが、植物を植えるのではなく環境に若干手を加えることで生まれてくるランドスケープを楽しむことをできればと思った。

